

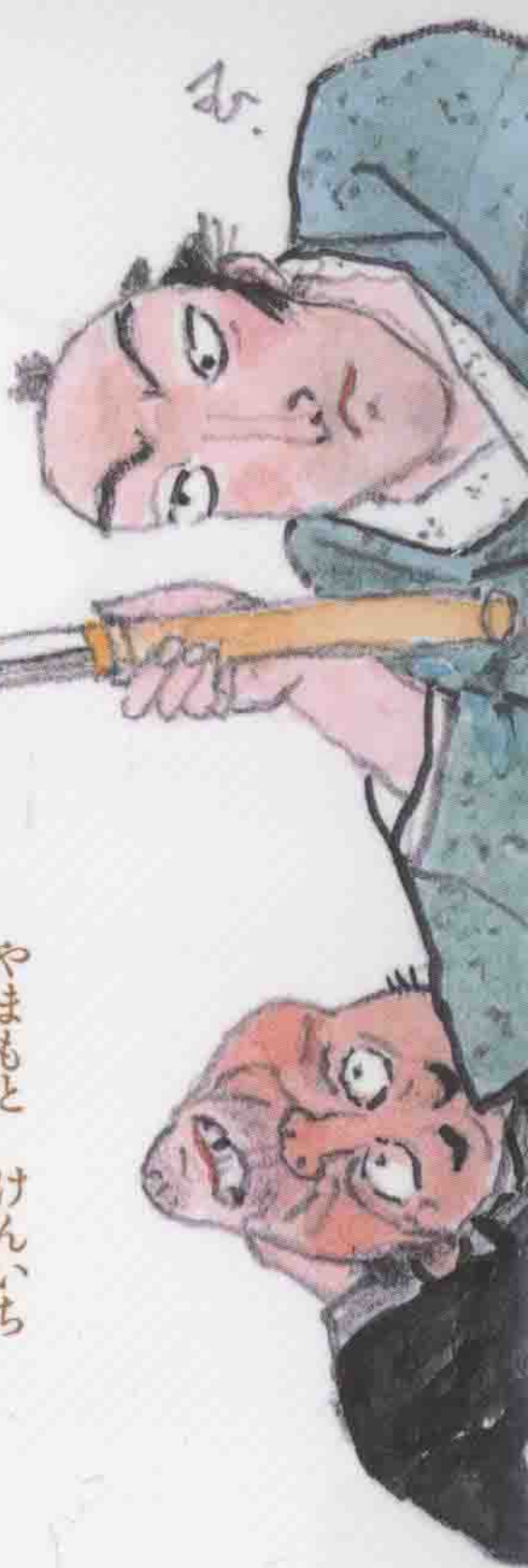
太刀

黄金の

刀剣商ちようじ屋光三郎

山本兼一

やまもと けんいち





講談社文庫

常州大学図書館
藏書章
黄金の太刀

刀剣問屋よし屋光三郎

山本兼一

講談社

〔著者〕 山本兼一 1956年、京都府生まれ。同志社大学卒業。1999年『弾正の鷹』（祥伝社文庫）で小説NON短編時代小説賞佳作。2004年『火天の城』（文春文庫）で第11回松本清張賞を受賞。2009年『利休にたずねよ』（PHP文芸文庫）で第140回直木賞を受賞。ほかの著書に刀剣商一作目の『狂い咲き正宗 刀剣商ちょうじ屋光三郎』（講談社文庫）、『いっしん虎徹』、『とびきり屋見立て帖』シリーズ（ともに文春文庫）、『命もいらず名もいらず 上 幕末篇』『命もいらず名もいらず 下 明治篇』（集英社文庫）、『花鳥の夢』（文藝春秋）などがある。2013年末に映画「利休にたずねよ」が公開予定。

おうごん た ち とうけんしやう やこうごふろ
黄金の太刀 刀剣商ちょうじ屋光三郎

やまもとけんいち
山本兼一

© Kenichi Yamamoto 2013



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2013年9月13日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277631-8

黄金の太刀

刀剣商ちようじ屋光三郎／目次

黄金おうごんの太刀たち

7

正宗まさむねの井戸

69

美濃みの刀すすどし

118

きつね宗近むねちか

天国千年あまくに

丁子刃繚乱ちようじば

江戸の淬ぎにら

解説 清原康正

164

214

257

299

356



講談社文庫

黄金の太刀

刀剣商ちょうじ屋光三郎

山本兼一

講談社

黄金の太刀

刀剣商ちようじ屋光三郎／目次

黄金おうごんの太刀たち

7

正宗まさむねの井戸

69

美濃みの刀すすどし

118

きつね宗近 むねちか

164

天国千年 あまくに

214

丁子刃繚乱 ちようじば

257

江戸の淬ぎ にら

299

解説 清原康正

356

黄金の太刀

刀剣商ちようじ屋光三郎

黄金の太刀
おうごん
たち

一

光三郎は、鍛冶平と連れだって神楽坂を上っていた。

坂の上の毘沙門天の門前には、葎簀張りの茶店が何軒かあるだけだったが、ちかごろ料理屋ができた。その店で、刀の会がある。嘉永七年（一八五四）の正月が明けて、松がとれたばかりのことである。

よく晴れた日の午の刻まえで、ふり返ると、江戸の町の薨がどこまでも続いている。去年のペルリの来航以来、世の中は騒然としているが、風の揚がった風景は、いかにものどかだ。あたりは武家屋敷が多いのに、坂を歩いているのは町人が多い。どうやら毘沙門天で、祭りでもあるらしい。

「黄金鍛え^{ぎた}つてのを、知^しつて^るかい」

刀袋^{かたなぶくろ}を手^てにしてすこし後^{のち}ろをついてくる鍛冶平^{かやへい}がたずねた。

丸顔^{まるがは}で色^{いろ}が黒^{くろ}くて乱杭^{らんぐいば}齒^はで、いたつて品^{しな}のない顔^{かほ}をして^{して}いるが、刀^やに偽銘^{ぎめい}を切^きらせたら、天下一^{てんかいつ}の腕前^{わんぜん}である。

「おうごんぎたえ……、なんだいそりや」

「なんでも、鉄^{かね}の鍛錬^{かんと}に黄金^{こんごん}をまぜて仕上^{しじやう}げるらしいぜ」

「そんなことして、どうするんだ」

折^よれず、曲^まがらず、よく切^きれる刀^やを鍛^かえるためには、なんといつても、刃鉄^{はがね}の質^{しつ}が問題^{もんだい}である。やわらかい黄金^{こんごん}など混^まぜたら、すぐ^{すぐ}に曲^まがつてしま^{しま}うだろ^う。いや、そもそも、金^{きん}が鉄^{てつ}とうまく混^まざり合^あうものかどう^{どう}か。

「金の筋^{すぢ}が入^いつて、剣相^{けんさう}がよくなるんだとき。ちかごろ大評判^{だいへいばん}で、高値^{こうぢ}なのに、旗本^{はたもと}連中^{れんちゆう}が競^{きやう}い合^あつて買^かつて^るそう^うだ」

「けつ、ばかばかしい」

光三郎^{みつさぶろう}は、悪態^{あくたい}をつかずにはいられない。

「くだらねえ。旗本^{はたもと}なんて、ほんとに大馬鹿^{だいばか}野郎^{やろう}ばつかりだ^な」

自分^{自分}だつてもとは旗本^{はたもと}だつたが、いまは町人^{ちやうじん}だ。だからこそ、武家^{ぶけ}のくだらなさ

が、かえつてよく見通せる。

「おめえは、現物を見たのか」

「いや、評判を聞いたただけだ。そんなろくでもねえ刀を欲しがる侍さむらいがいるのなら、おれだつて鍛えてみようかと思つたのさ」

「やめとけ。そんな外道げどうの刀」

「しかし、よろこんで飛びつく旗本がいるつていうんだから、商売にしない手はねえぜ」

鍛冶平のことばに、光三郎は大きく首をふつた。

「情けねえ。旗本は、いつからそんな腑ふ抜けになつちまつたんだよ、まつたく」

「へへ。ぼやきなさんな。目の利きかねえ連中は、黄金鍛えに夢中になつてりやいいのさ。そのおかげで、おれたちが、いい刀を拝おがめればいいじゃねえか」

「おい。おれたち……、なんて、仲間みたいにいうなよ」

鍛冶平とは、四谷北伊賀町よつやきたいがまちの刀工清麿とうこうきよまろの鍛冶場で知り合つた。いわば、兄弟弟子の関係である。

しかし、今日はちがう。

「いいか、今日の会では、おれが主人で、おまえは供の家来なんだぜ。かくべつのは

からいで連れてつてやるんだから、ありがたいと思つて感謝しろ」

「へつ、勘当されて町人になつたくせによ、こんなときだけ、侍面さむらいづらしやがつて、いやな野郎だぜ、まつたく」

鍛冶平が、口もとを歪ゆがめた。

「いい刀を見るためなら、嘘くらいつくさ。文句を言うんじゃないやねえよ」

今日、料理屋に集まるのは、旗本のなかでも、刀剣好きの者ばかりである。

よだれの会——と称しているが、垂涎すいぜんものの刀を見て、純粹に刀の鉄かねと鍛錬の良さを愛めでるのが眼目だ。

刀の数寄者すきしやは、手に入れた名刀を自慢したくてたまらない。そこで、ときおり刀を持ち寄つては、見せ合うことにしたのである。

集まるのは十人ほどで、生家である御腰物奉行の家おこしのものぶぎようにいたころの光三郎は、毎回欠かさず出席していた。勘当され、家を飛び出してから、行つていなかった。

刀好きの友人勝田清右衛門かつたせいえもんが、芝日蔭町しばひかげちようのちようじ屋にやつてきて、久しぶりに誘つてくれたので、出かけてみることにしたのである。

そのとき、たまたま店にいた鍛冶平に拌み倒されて、連れて行く約束をした。

刀の会には正装していくのが礼儀なので、光三郎ばかりでなく、今日は、鍛冶平も

めずらしく羽織はおりを着て、袴はかまをつけている。髷まげは町人のままだし、腰の二本差しはないが、内輪うちわの会なので、そこまでうるさくいう者はいない。

光三郎と鍛冶平は、人でにぎわう毘沙門天を横目で見ながら、手前の路地を曲がった。

教えられた場所に、新しい料理屋ののれんがかかっていた。

二

ちいさな庭に面した座敷には、すでに、七、八人の男たちが集まっていた。

みな、似たような年回りの旗本のせがれたちで、なかには数千石ごくらくの高禄こうろくの家の跡取りもいる。しかし、この集まりでは、禄高や役職とは関係なく、よい刀を持って来た者が、よだれを流して羨望せんぼうされる。

「おう。久しぶりだな。家を飛び出して刀屋になつたと聞いたが、まことのようにだな」

一刀流いっとうりゅうの遣い手つかでもある佐々木源之進ささきげんのしんが、光三郎を見て顔をほころばせた。幼いころ、一緒に道場に通った仲だから、いたって気兼ねがない。

「へっへ。こっちのほうか、よほど気楽さ」

光三郎は、町人風の鬚のた^たぼを指さした。

「まったくだ。大きな声では言えぬが、ちかごろの幕閣の狼^{ろう}狽^{ばい}ぶりを見てみると、ほとほと情けなくなる。上の者があ^あの体^{てい}たらくでは、どうにもこうにもならん」

ペルリにつづいてロシアの使節もやってきたので、幕府では、御^お目^め見^み得^え以上の旗本に、国防の意見を聞くほどの周章^{しゅうしょう}ぶり^りで、いまもつて断固とした政策をとれずにいる。あきれかえった無策というほかない。

「おお、そんなご時世だからこそ、存分に刀を眺めよう。よい刀を見ていれば、心が研^とぎすまされ、叡^{えい}智^ちが湧^わいてくるというもの」

芝の店に誘いに来てくれた勝田が、刀袋から青貝^{あおがひ}を蒔^まいた鞆^{さや}を取り出しながらい^いつた。この男の数寄者^{こん}ぶりも、病膏^{やまいこう}盲^{もう}である。

座敷の隅には、紺^{こん}色の毛氈^{もうせん}が敷かれ、すでに刀を寝かせる紫色の枕が用意してある。

「なにを見せてくれるのだ」

「へへ、腰を抜かすなよ」

抜き払った刀をまっすぐに立てて、勝田が得意げに目を細めた。